

「遥かなる勝利へ」★★★★★

2013(平成25)年9月20日逢寛<ビジュアルアーツ専門学校 試写室>

監督:ニキータ・ミハルコフ  
セルゲイ・ペトロヴィチ・コトフ(元陸軍大佐) /ニキータ・ミハルコフ  
ドミートリ・アーセンティエフ大佐(秘密警察の幹部) /オレグ・メンシコフ  
ナージャ・コトフ(看護兵として従軍するコトフの娘) /ナージャ・ミハルコフ  
マルーシャ(コトフの元妻) /ヴィクトリア・トルストガノフ  
スターリン/マクシム・スハノフ  
2011年・ロシア映画・150分  
配給/コムストック・グループ、ツイン

<『戦火のナージャ』の興奮をもう一度！>  
ロシアのニキータ・ミハルコフ監督といえば『12人の怒れる男』(07年)  
(『シネマールム21』215頁参照)と思ひ込んでいた私は、『戦火のナー  
ジャ』(10年)を観て、ド肝を抜く戦闘シーンの連続と美しいラストシーンに大興  
奮(『シネマールム26』110頁参照)！ロシア映画史上最大の製作費を投入  
し、「ロシア版プライベート・ライアン」(98年)とも形容された2時間30分  
のこの大作は、とにかくすごかった。『戦火のナージャ』が同監督の『太陽に灼か  
れて』(94年)の続編であることはその時はじめて知ったが、本作『遥かなる勝  
利へ』はそれに続く3部作の完結編になるものだ。

日活がオールスターでつくった山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作(70、7  
1、73年)(『シネマールム5』173頁参照)は五味川純平の同名の長編小説  
を映画化したものだから、本来は『人間の條件』全6部作(59~61年)(『シ  
ネマールム8』313頁参照)以上の長尺になるはずだったが、製作費の関係で無  
理やり全3部作で完結せざるをえなかったらしい。しかし、『太陽に灼かれて』  
『戦火のナージャ』『遥かなる勝利へ』はニキータ・ミハルコフ監督の強い意思に  
よって全3部作にまとめられただけに、その完成度は高い。『戦火のナージャ』で  
は、父親のアレクセイ・セルゲエヴィチ・コトフ(ニキータ・ミハルコフ)が懲罰  
部隊の隊長としてムチャクチャな戦闘に参加せざるをえなかったし、娘のナージャ  
(ナージャ・ミハルコフ)も看護兵ながら生死スレスレの境目を体験させられてい  
た。そのうえ、ラストシーンでナージャは、死んでいこうとする若い兵士の頼みに  
応じて、白く美しい胸を見せてやるサービスも・・・。

『戦火のナージャ』が2時間30分なら、『遥かなる勝利へ』も同じ2時間30  
分。何とも見事な編集技術だが、『戦火のナージャ』の2時間30分は短く感じた  
ほどだ。そんな3部作の完結編と聞くと、それだけで胸が躍ってくる。『戦火のナ  
ージャ』の興奮をもう一度！

<鉄壁の要塞VS塹壕戦、そして督戦隊とは？>  
塹壕戦は、ドイツのレマルクが1929年に発表した小説『西部戦線異状なし』  
で描かれた第1次世界大戦特有のもの。私はそんな風に思っていたが、1943年  
当時の第2次世界大戦における独ソ戦でも、塹壕戦はあったらしい。他方、コンク  
リートでゴチゴチに固められた要塞といえば、日露戦争(1904年~05年)に  
おける旅順二〇三高地の戦いを思い出すが、今ドイツ軍が立て籠もっている要塞  
は、もちろんそれ以上の鉄壁さだ。本作冒頭、ニキータ・ミハルコフ監督はそんな  
ソ連軍の塹壕の様子とドイツ軍の要塞の中で銃座を担当する兵士の様子を、飛び回  
る蚊に託して描いている。ちなみに、そこでは人間の血を吸うのはメスの蚊だけだ  
という兵士の説が有力だったが、その真相は・・・？

それはどうでもいいのだが、「赤軍」と呼ばれるソ連軍の指揮命令系統がいかに  
八チャメチャであるかが、本作冒頭の許っ払い少将の攻撃命令の下し方でわかる。  
つまり、酒の席(?)でちょっと気分を害されたこの少将は、その腹いせに懲罰部  
隊の指揮官を呼びつけ、これから1時間以内に攻撃体制を整え要塞への正面攻撃を  
行うべきことを命じたのだ。そんなことをすれば攻撃隊はほとんど全滅してしまう  
ことは明白だが、軍隊では上官の命令が絶対であることは、かつての日本陸軍もソ  
連の赤軍も同じだ。そんな中、懲罰部隊の一員として塹壕に入っていたコトフ(ニ  
キータ・ミハルコフ)は動揺する兵士たちに対して「戦えば生き残れる可能性はあ  
る」と諭していたが、それって一体どういう意味？

ちなみに、字幕には「督戦隊」という言葉が数回出てくるが、あなたはその意味  
を知ってる？これは自分の軍隊を後方から監視し、攻撃命令に従わず退却したり、  
降伏するような行動をとれば、これに攻撃を加えるための部隊のことだ。したがっ  
て、攻撃命令に従わず退却したりすれば必ずこの(自軍の)督戦隊によって殺され  
るから、まだ敵に向かって突撃した方が生き残れる可能性があるというわけだ。な  
るほど、なるほど。しかし、それにしても・・・。

<こんなところでまで、なぜあいつが・・・>  
『太陽に灼かれて』『戦火のナージャ』そして本作は全3部作だから、ロシア革  
命の英雄であるコトフがなぜ政治犯の汚名を着せられ懲罰部隊の一兵卒になってい  
るのか、は『太陽に灼かれて』に遡らなければならない。しかし、『戦火のナー  
ジャ』でも本作でも、そこらあたりはニキータ・ミハルコフ監督のフォローはしっか  
りしているから、『太陽に灼かれて』を観ていなくても後のストーリー展開はわか  
るようにつくられている。コトフを政治的に抹殺した男はドミートリ(オレグ・メ  
ンシコフ)。彼は恋人だった美しいマルーシャ(ヴィクトリア・トルストガノフ)  
をコトフが妻にしてしまったことを恨み、コトフを卑劣な真にはめたわけだ。それ  
によってコトフは祖国の裏切り者だということを「自由」させられたわけだが、  
「裏切り者」の撲滅に執念を燃やすスターリン(マクシム・スハノフ)はドミート  
リに命じて今なおコトフの行方を捜索させていたから大変。そして、間の悪いこと  
に(?)敵の要塞への攻撃命令の約30分前になってドミートリが塹壕の中にいる  
コトフを発見したから、さらに大変。さあ、ドミートリの姿を目の前に見たコトフ  
はそこでいかなる行動を？

大量の部隊を動員する総攻撃は綿密に練られた作戦の下で実行させるのが普通だ  
が、戦争は生きものだから、時としてとんでもないハプニングが発生するものだ。  
日本海軍だって、1941年12月8日の真珠湾攻撃はほぼ作戦どおりの攻撃が成  
功したが、1942年6月5日のミッドウェー海戦は、想定外のハプニングのため  
とんでもない悲劇を生むことになった。スクリーン上では、ドミートリの姿を発見  
して塹壕内を逃げ回りながらいよいよどん詰まりとなったコトフが、我を見失った  
ためか突然塹壕から這い上がり、「突撃！」と大声をあげて要塞に向けて走り出す  
姿が登場する。これを、攻撃命令が出されたための突撃開始と受け止めた兵士たち  
は次々と塹壕から飛び出し、要塞目掛けて駆け出し始めたから、要塞からは雨あ  
られの砲弾と銃弾が・・・。コトフを追いかけて飛び出していったドミートリはこれ  
を見て引き返そうとしたが、そんな姿を督戦隊に見つけられると、いくら「俺は大  
佐だ！」と大声で弁明しても容赦なく督戦隊から銃弾が降ってきたから、ドミート  
リも要塞に向かって走っていく他なかった。こんな戦闘に手馴れたコトフの指導を  
受けながらドミートリは伏せては走り、伏せては走りをくり返したが、さてその結  
末は？それにしても、なぜこんな塹壕にまでドミートリが・・・？

<男たちに囲まれた中での出産シーンにビックリ！>  
前作の『戦火のナージャ』は、邦題のタイトルになっているほどだから、沈めら  
れた船から機雷にしがみついたの脱出シーンや、「モスクワ攻防戦」での激しい戦  
闘シーン等々でナージャは大活躍していた。しかし本作でのナージャは、戦場での  
あまりに過酷な体験によって口が利けなくなっているという難しい役柄に設定され  
ている。看護兵として従軍しているナージャは今、軍の病院で負傷兵や物資を運搬  
する任務に従事していたが、現場では例によって(?)車は足りない、人手は足り  
ない、のいないづくし。したがって、お腹を大きく膨らませた、今にも赤ちゃん  
が飛びだしそうな妊婦を乗せるトラックなどないのは、当たり前。そんな中でナ  
ージャは敢然と一人の妊婦に対してトラックに乗るよう指示。一体誰の命令でそんな  
勝手なことやってるんだ、と怒る兵士の足に対してナージャがいきなり拳銃をぶ  
っ放したから、この兵士はビックリ。さすがロシア革命の英雄コトフの娘だけのこ  
とはあると、その度胸の良さに感心。もっとも、ニキータ・ミハルコフ監督がその  
後に見せる、トラックの荷台上で大勢の兵士たちに見守られた中での出産シー  
ンは、未だかつて見たことのないものだ。雨の中のたった一人での迫力ある出産シ  
ーンといえば、『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』  
(04年)の第三話、1980年の花(ホア)の物語で章子怡(チャン・ツイ  
ー)が見せた大熱演を思い出す(『シネマールム17』192頁参照)が、本作に  
おけるこの出産シーンの迫力も相当なものだ。

さらにビックリするのは、移動中のトラックを攻撃するべくドイツの飛行機が爆  
弾と機銃掃射を仕掛けてきたためトラック群は大混乱し、蜘蛛の子を散らすよう  
に、あちらに逃げ、こちらに逃げたが、何度かの飛行機の襲来が収まってみると、  
そこで生き残っていたのは…。この妊婦の乗ったトラックだけは動くことができず  
停止していたのだから、本来ならこれこそ絶好の標的になっていたはずだが、なぜ  
ドイツの飛行機からの爆弾や機銃はこのトラックを避けていくことになったの？赤  
ちゃんを取り上げ、そのへその緒を切った男たちは「これぞ、奇跡」と神を称え喜  
び合ったが、ニキータ・ミハルコフ監督は何とぞ神な戦闘シーンを描き出すもの  
だ、と感心。

<俺を一体どこへ？>  
本作はいくつかのストーリーが重層的に組み合わせられているが、それが必ずしも  
時系列のままではないので、前2作のストーリーを知らない人は少しわかりにくい  
かもしれない。とりわけ、わかりにくいストーリーは、ドミートリの恋人であった  
マルーシャをコトフが奪ったことによって発生した「三角関係」のもつれが、ドミ  
ートリの密告によってコトフの革命の英雄たる地位・名声を奪うところまで発展し  
ていったことだ。中国での薄熙来裁判は9月23日に終身刑の判決が言い渡された  
ことによって終結したが、被告は「この裁判は不公平だ」と叫んだそうだし、薄熙  
来を支持する中国人もたくさんいるから、これですんなり権力闘争が収まるとは到  
底考えられない。次なる権力闘争が、いつどこでどんな形で勃発するかが注目的  
だ。

コトフはドミートリの密告によって全く不本意な自白を強要され、その結果以降  
ずっと懲罰部隊の一員に成り下がっているわけだが、それでもなお疑い深いスター  
リンはドミートリを使ってコトフの行方を探し求めていたから、そのドミートリに  
コトフが発見されたら、それにコトフの運命は完全にアウト…。誰しもそう思う  
ところだが、さてドミートリはコトフを一体どこへ連れて行くの？

<再会した人たちは？それぞれのその後の運命は？>  
あの激しい戦闘から2人して生き延びることができたこと自体が奇跡だが、今ド  
ミートリがコトフを連れて行ったのは、1936年にコトフ、マルーシャ、ナー  
ジャ、ドミートリの4人がひと夏を過ごしたあの避暑地の別荘だ。てっきり死んでし  
まったとばかり思っていた愛妻マルーシャが生きていることをドミートリから聞か  
されたコトフが驚いたのは当然だが、それ以上に目の前に立っているコトフを見て  
驚いたのは、今は村の男と結婚し、一児までもうけているマルーシャとその両親  
だ。このようなお互いにとって全く意外な展開をニキータ・ミハルコフ監督は美に  
うまく演出し、コトフとマルーシャの動揺する気持ちを描き出している。

ちょっと不思議なのは、この状況をあくまで冷静に観察しているドミートリの対  
応だが、ドミートリはこんなことをして大丈夫なの？ドミートリがスターリンから  
命じられた任務は地の果てまでコトフを追い詰めて探しだし、スターリンの下へ連  
れてくることではなかったの？自白させるためにコトフの左手の甲を金づちで叩き  
割るシーンを見ていると、ドミートリが自分の取調べを受けるに際して意外にも素  
直に「自白するよ」と言ったのも、わかるような気がする。だって、どうせ自白に  
追い込まれるのなら、コトフのような痛い目に遭うだけ損というものだから  
・・・。しかして、全く意外なことに、かつての愛妻マルーシャと再会すること  
ができたコトフのその後の運命は？そして、マルーシャは？さらに、そんな神な演  
出をしたドミートリの運命は・・・？

<スターリンがコトフに下した命令とは？>  
日露戦争の初期の命運を決する戦いが「二〇三高地」の戦いだった。そこで乃木  
希典大将は何度も決死隊を募り、突撃命令を下したが、トーチカでガチガチに固め  
られた要塞から雨あられと撃ち出されてくる「機関砲」なる新兵器を前に、日本兵  
はバタバタと撃ち倒されていった。身体を防備するものが何ひとつないまま、無謀  
な突撃をくり返しても機関砲の餌食になるしかないことは、誰が見てもわかるはず  
だ。しかして、ニキータ・ミハルコフ監督が演出する、スターリンとコトフ二人だ  
けの会話(というより、一方的なスターリンからの指示)はさすがに迫力満点だ。  
中国における薄熙来と同じように政治的に完全に失脚させられていたコトフが、な  
ぜ今すべての名誉を回復し、かつ中將という地位に復帰できたの？そういう人事異  
動がたった一人の権力者の意向で決まるのがいかにも共産主義国家だが、スター  
リンがヒトラーと同じような偏執狂的な性癖を持っていたことは周知の事実。したが  
って、そこでスターリンがコトフに下した命令は、とにかくムチャクチャだ。

共産主義国家における懲罰部隊と督戦隊には、自由主義国家におけるそれと大き  
く違う特徴があることが、本作を観ているとよくわかる。ここでスターリンがコト  
フに下した命令は、従軍経験のない1万5000人の市民兵を含む懲罰部隊を指揮  
して「ドイツ軍要塞への突撃を敢行せよ」というもの。もちろん、その命令を拒否  
する自由などあるはずがないし、もしドイツ軍の銃弾を怖がって退却でもしようも  
のなら、自軍の督戦隊の銃弾でやっつけだ。中將としての威厳ある軍服に身を包み、  
1万5000人の兵たちの前に立ったコトフだが、さて彼は乃木希典大将と同じよ  
うに、突撃命令を下すだけのバカな指揮官？それとも・・・？二〇三高地における日本  
(陸軍)は曲がりなりにも標準軍装を装備していたが、スクリーン上を見る限り、  
ロシア軍の武器は一本の棒切れのみ。さあ、こんな状況下でコトフ中將はいかなる  
決断を？

<この兵士たちの「総攻撃」をどう見る？>  
大量のエキストラを動員したこの戦闘シーン(?)は、あなた自身の目でしっか  
りと確認してもらいたい。そこには「ロシア版プライベート・ライアン」と称さ  
れた『戦火のナージャ』ほどの迫力と興奮度はない。しかし、ニキータ・ミハルコ  
フ監督が演出する全3部作のラストにふさわしいその意外性にビックリ。ちなみ  
に、『スターリングラード』(01年)(『シネマールム1』8頁参照)で観たよ  
うな狙撃兵が樹木の中に潜み、じっとドイツ軍要塞を狙っているシーンが印象的だ  
ったが、さてそこから生まれてくる、その後のあつと驚く大爆発とは・・・？

1942年6月5日のミッドウェー海戦では日本の虎の子の空母、赤城・加賀・  
飛龍・蒼龍の4隻が沈められてしまったが、それは空母の甲板上で爆弾から魚雷へ  
の切り替え作業をしていたところにアメリカ空母の艦載機が突如襲来してきたため  
だ。つまり、爆弾を山ほど抱えた状態では、いかに小さな火であつてもいったん引  
火すれば大変。つまり、いかに堅固な要塞でも、内部で爆発を起こせばイチコロと  
いうことだ。「ある偶然」から起きた、そんな要塞の大爆発を見た、棒切れ1本だ  
けの武器を肩に揚げたロシア軍兵士たちは大喜び。まさに、彼らにとっては、地獄  
から天国への急転換だ。

<父娘の再会は号泣モノだが、その後は一転・・・>  
そんな軍団(?)の先頭に立って行進中のコトフを発見し、利けない口で必死に  
「ババ！ババ！」と叫びながら駆け寄ってきたのが、すぐ近くの戦場にいたナー  
ジャだ。ここで全く偶然に生まれた父娘の再会は感動モノで号泣モノだが、間が悪  
かったのはナージャが走ってきたのが地雷原の中だったということ。それを知って  
いるナージャの仲間たちは必死で止めようとしたが、父親の姿を見て興奮し切ってい  
るナージャには、そんな声が耳に入るはずはない。お互いに駆け寄る中で2人はピ  
ツパリ抱き合おうとしたが、その前にナージャの右足が地雷を踏んでしまったか  
ら、さあ大変だ。

地雷は一度踏んづけてしまった以上、ニツチもサツチもいかなはずだが、コト  
フは一方で百戦錬磨の闘士として、他方では愛しい一人娘とやつと再会すること  
ができた父親として、ここでいかなる行動を・・・？スクリーン上に見るコトフの  
表情やナージャにかける言葉からは、あくまでコトフは冷静そのもの。危機的状況  
にあつて男はかくあるべし、という見本のような姿だが、そこから先に描かれる世  
界は本当に手に汗握るものになってくる。まず、コトフがナージャに出した指示  
は、とにかく落着け！落着け！ということ。その上で、次々とコトフが出ていく  
指示にナージャが従っていくと、いつの間にか、地雷を踏みつけている足はナー  
ジャの右足からコトフの左足に変わっていた。そして、両足が自由になったナー  
ジャはコトフが命じたまま一歩また一歩と地雷からバックし始め、その距離はコトフ  
が「命令」したように次第に20歩に近づいていったが、さてそれから先は・・・？

「あの時」以来別れ別れになり、互いにその生死すらわからなかった父娘のこん  
な形で再会はまさに感動モノだから、その喜びはあなた自身で味わってもらいた  
いが、その後は一転・・・。ニキータ・ミハルコフ監督が描く全3部作の、こんな  
あつと驚くラストシーンをじっくりと味わいたい。